◆ 古代蝦夷（えみし）の世界をのぞいてみよう ◆

2019.07.27.　今野 公顕

＜ 目 次 ＞

1　古代とは

・日本史の時代区分のひとつ

・中国の制度をまねて，「律令に基づく統治体制」を整えた時代。
　天皇中心の中央集権国家を目指し，法制，税制，官僚制など，国家と政治の体制を整えた。

・平安時代後半の貴族社会を経て，武家社会（中世）へ。

原始	**古代**	中世	近世	近代	現代
旧石器時代	**飛鳥時代**	鎌倉時代	江戸時代	明治時代	昭和時代
縄文時代	**奈良時代**	室町時代		大正時代	平成時代
弥生時代	**平安時代**	戦国時代			令和時代
古墳時代					

（～時間と地域の縦横に，水面の波紋のように拡がるその移り変わりの特徴を。）

2　東北古代史のなかでの志波（紫波，斯波，，，）

（１）古墳時代

古墳時代（３～６世紀頃の前方後円墳が各地に作られた時代）の“前方後円墳体制“（ヤマト王権連合）の下で各地に築造された「いわゆる古墳」の有無が，その時代やその後の社会体制を表す。

・**古墳あり**：**東北南部**：宮城県北部（～岩手県南部）
　＝ヤマト王権連合の一員として古墳を築造
　･･･弥生文化があり稲作とムラ，村長の存在　→豪族・国造・前方後円墳体制へ

・**古墳なし**：**東北北部**以北：宮城県北部以北
　＝ヤマト王権連合の外
　･･･続縄文文化的・狩猟採集とムラ　→継続または寒冷化による人口減少

最北の前方後円墳

・太平洋側　**角塚古墳（岩手県奥州市胆沢区）**45m・・・＊宮城県北部が主体

・日本海側内陸　坊主窪１号墳（山形県山辺町）25.5(27.5)m

・日本海側沿岸　菖蒲塚古墳（新潟県新潟市）53m

＊太平洋側について，宮城県北部には普遍的に存在。角塚古墳の１基だけが数十キロ北にあることから，ある時期は前方後円墳体制下に入ったが，定着しなかった？とみられる。

（２）飛鳥時代　７世紀頃

645 年大化の改新以降の中大兄皇子，中臣鎌足らによる改革。「律令体制」構築の時期。

・南部　前方後円墳体制から，天皇中心の律令体制へ移行。
　　地方は国郡里の行政区画で統治され，各地に役所（国府，郡家）が設置される。

・北部　律令体制の外。
　　温暖化や技術進歩により，稲作が営まれムラが形成される。⇒「蝦夷」の世界

（３）奈良時代　８世紀頃

・南部　律令体制

・北部　蝦夷と城柵，律令体制の北進･･･各地に村長がいるムラが増える。

（４）平安時代　９世紀頃以降

・北部　9 世紀初頭，盛岡周辺まで城柵による統治。「郡」が置かれ，村長から領主層が育つ。
　　･･･安倍氏，清原氏，藤原氏の時代につながっていく下地となる。

３　古代東北の住人，蝦夷・毛人・エミシ・エゾ とはなにか？

あなたは「**蝦夷**」という文字を見て，どのように読みますか？

「エゾ」と読んで，北海道やアイヌの人たちのことではないか？と思われるのが普通だと思います。

しかし，古代においては，「蝦夷」と書いて「エミシ」と読み，古くは関東以東，主には東北地方に住んだ人々を指します。

蝦夷（えみし・えびす・えぞ）は，日本列島の東方，北方に住み，それ以南・以西に住んだ人（都人など）によって異族とみなされていた人々に対する呼び方。時代によってその範囲は変化します。

たとえば，このような歌が残されています。

エミシを一人百な人（ひだりもも）　人は云えども抵抗（たむかい）もせず　（『日本書紀』神武紀）

（エミシとは一人で百人を相手にするくらい強い人だと，人々はいうけれど，それほどでもなかったよ）

この歌は，神武天皇が大和の八十梟師（やそたける）を討ったときに歌った，と伝えられる歌です。

また，飛鳥・奈良時代などに活躍した都の有力者の中にも，蘇我蝦夷(そがのえみし)や小野毛人(おののえみし)など，エミシという名前が登場します。このことから，エミシという言葉は，古くは「強い人」「恐ろしい人」などといった「畏敬の念」(いけいのねん・崇高なものや偉大な人を，おそれうやまう気持ち)をも持った言葉，決してさげすむような意味の言葉ではなかったことがわかります。

では，どのような経緯で，エミシが東北地方の人々を指すようになったのでしょうか。

はじめは畏敬の念を持った言葉だったのですが，時が過ぎるにつれ，都の人々にとって「強い人」「恐ろしい人」は，古くは都の外の周辺に居た「自分達と言葉や生活文化のちがう人々」という意味になったようです。しかし，政府が周囲を平定し，その範囲は大化の改新ごろには，主に関東北部から東北地方以北に限られるようになります。この頃，エミシという文字も「毛人」から「蝦夷」に変化するようです。

以後，政府勢力が北上するにつれ，エミシとよばれる人々の範囲が北へ変化していき，より北の人を指すようになっていったと考えられます。かつて蝦夷だった人たちで，政府の範囲内に住んだ人々は俘囚（ふしゅう）と呼ばれました。

そして平安時代末から鎌倉時代の初め頃には，読み方もエミシからエゾに変化し，中世以降は，北海道域とそこに住む人々，つまり後のアイヌのことを指すようになっていったと考えられています。

語源は，「中華思想」に基づきます。古代中国では，帝(みかど)の徳によって，東夷(とうい)・北狄(ほくてき)・西戎(せいじゅう)・南蛮(なんばん)を従えることが良い国でした。その世界の中心に中国の帝がいる＝「中華」という思想を，先進国家を模倣し負けない国作りを進めていた日本の政府も導入したもの，といえます。

すなわち，日本の中心は「天皇」であり，その勢力の周囲（東西南北）には多くの未開の蛮族が住み，それら蛮族ですらも天皇の徳を慕い，従ってくる。そのくらい日本の天皇は徳の高い治世をおこなう先

中華思想の模式図
中心に天子，一番外の周囲は「化外の地」

進国家である，というアピールをしたのです。政府権力外の“異民族”を，それぞれ東夷・北狄・西戎・南蛮と呼び，これらの民を天皇の徳（＝威光）によって統治することを目指すという，古代日本政府の東北経営の根源的な考え方ともいえます。

古代の東北地方に住んだ人々も，中世以降北海道に住んだアイヌも，都の人々とは生活のスタイルや言葉など文化が大きく異なっていました。人種上では，蝦夷とそれ以南に住んだいわゆる日本人の差は，ほとんど無かったと見られます。たとえば，現代の朝鮮半島や中国大陸の人々と日本人の違いは，言語・風習など文化が異なることに近いかもしれません。

現代の私達も，生活スタイルや言葉の違う人々を外国人・異邦人と呼びます。それと同じように，たまたま東北～北海道に住んでいた人々が，エミシ・エゾとよばれたわけです。

清水寺縁起絵巻：重要文化財/土佐光信　筆/室町時代/東京国立博物館蔵　/清水寺(京都府)は坂上田村麻呂が再興したと伝わる。この絵は田村麻呂が率いる政府軍がエミシと戦う様子を描いたもの。

４　志波村について

（１）古代の文献記録

古代から残る文献史料には，志波・斯波は何回か姿を現す。

志波城が盛岡市太田の地にあることから，当時は現在の盛岡市南部（おそらく雫石川以南）～紫波町付近までを指したものと考えられ，後には行政区画として「斯波郡」がおかれ，これは志波村とほぼ同じ範囲だったものと考えられる。その中でも，これまでの発掘調査成果から，古代志波村の中心地のひとつに盛岡市南西部（太田～本宮）があげられる。

出羽国志波村の賊，叛逆し国と相戦ふ。官軍利あらず。下総，下野，常陸等国の騎兵を発し之を伐つ。

（『続日本紀』宝亀７（776）年５月２日条）

陸奥の軍三千人を発して胆沢の賊を伐つ。　（『続日本紀』宝亀７（776）年 11 月 26 日条）

出羽国の俘囚３５８人を大宰管内および讃岐国に配す。

（『続日本紀』宝亀７（776）年 11 月 29 日条）

陸奥鎮守将軍　紀朝臣広純言さく「志波村の賊，蟻結毒ほしいままにし，出羽国の軍，之と相戦いて敗退す」と。是について近江介従五位上佐伯宿禰久良麻呂をもって鎮守権副将軍となし，出羽国を鎮せしむ。

（『続日本紀』　宝亀 8（777）年 12 月 14 日条）

出羽国の蝦夷叛逆す。官軍利あらず器杖を損失す。

（『続日本紀』宝亀 8（777）年 12 月 26 日条）

陸奥国言うさく，「斯波村の夷，胆沢公阿奴志己（いさわのきみあぬしき）等，使を遣わして請ひて曰く，己等王化に帰せんと思い，何日忘れず。而して伊治村の俘に遮られるため，自ら達する由なし。願わくば彼の遮闘を制し，永く降路を開かんと。即ち朝恩を示さんがため，物を賜いて放還す」と。　「夷狄の性，虚言不実なり。常に帰服と称し，唯利のみ是求む。自今以後，夷の使者あるも，常賜を加うるなかれ。」

（『類聚国史』巻 190　　延暦 11（792）年 1 月 11 日条）

越後国をして米三十斛，塩三十斛を造志波城所に送らしむ。

（『日本紀略』　延暦 22（803）年 2 月 12 日条）

是の日，造志波城使，従三位，行，近衛中将，坂上田村麻呂辞見す。彩帛五十疋，綿三百屯を賜う。　（『日本紀略』　延暦 22（803）年 3 月 6 日条）

陸奥国言うさく，「斯波城と胆沢郡と，相去ること一百六十二理里，山谷険にして往還難多し。郵駅を置かざれば恐らくは機急を闕かん。　伏して請うらくは，小路の例に准じ，一駅を置かん」と。之を許す。　（『日本後紀』　延暦 23（804）年 5 月 10 日条）

陸奥国に和我，稗縫，斯波の三郡を置く。　（『日本後紀』　弘仁 2（811）年 1 月 11 日条）

征夷将軍，参議，従三位，行大蔵卿兼陸奥出羽按察使，文室朝臣綿麻呂奏言すらく，「今官軍一挙し，寇賊遺るなし。事，須らく悉く鎮兵を廃し，永く百姓を安んぜんとす。而して，城柵等に納むる所の器杖軍粮，その数少なからず。遷し納むるまで，衛を廃すべからず。伏して望むらくは一千人を置き，その守衛に充てんことを。それ志波城は河浜に近く，屢（しばしば）水害を被る。須らくその処を去りて，便地に遷し立てんことを。伏して望むらくは，二千人を置き，暫く守衛に充て，その城遷しおわらば，則ち千人を留め，永く鎮の戍となし，自余は悉く解却に従わんことを。また兵士の設は，非常に備ふるためなり。すでに遺寇なし。何ぞ兵士を置かんや。但し，辺国の守，にわかに停むべからず。伏して望むらくは二千人を置き，その余は解却せんことを。また宝亀五年(774 年)より当年に至まで総じて三十八歳，辺寇屢動き，警絶ゆることなし。丁壮老弱，或いは征戍に疲れ，或いは転運に倦む。百姓窮弊し，未だ休息を得ず。伏して望むらくは，復四年を給い，殊に疲弊を休めんことを。それ鎮兵は次をもって差点し，輪転復免せんことを」てへり。並びに之を許す。

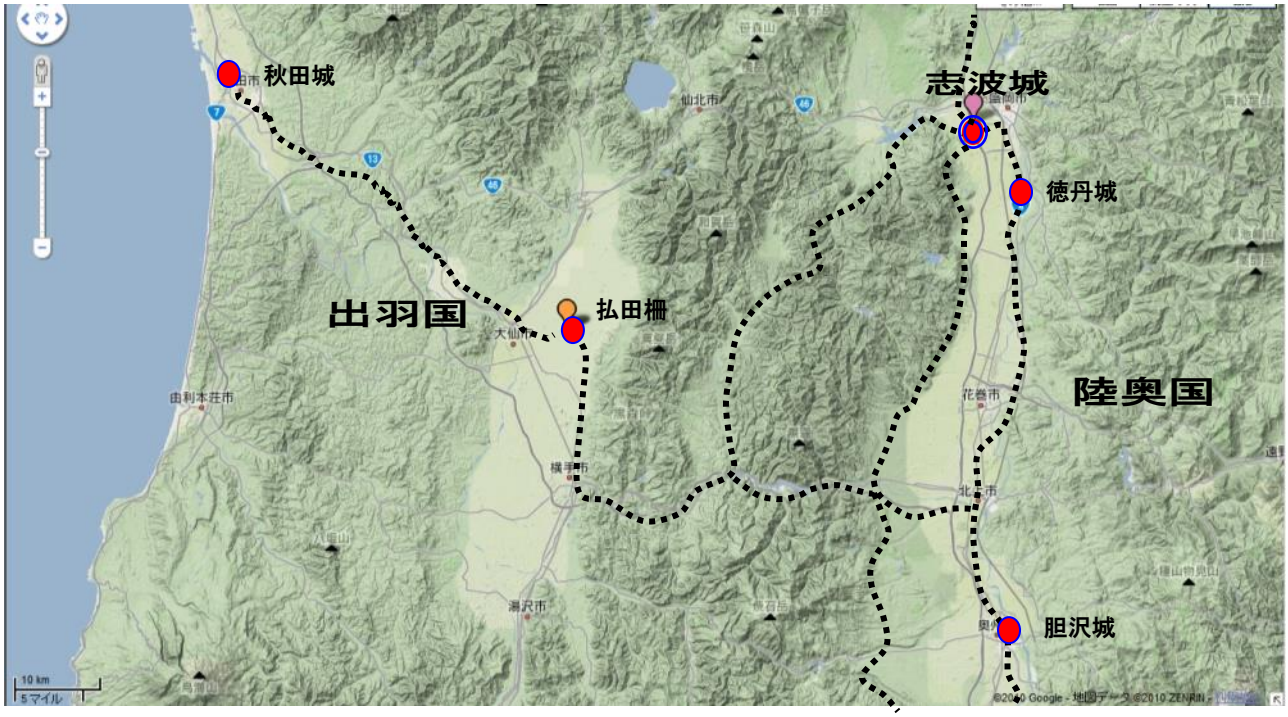
（『日本後紀』　弘仁 2（811）年閏 12 月 11 日条）

（２）出羽国志波村

文献資料によれば，８世紀後半の志波村は「出羽国」となっており，８世紀末になって「陸奥国」になる。志波村の人々が，どの国府・役所と関係をもったかが現れているものと考えられる。おそらく８世紀後半の出羽国の場合は，雄勝城（秋田県横手盆地付近にあったと考えられる城柵）との関係が深かったもので，８世紀末には，多賀城や宮城県北部の城柵との関係が強くなったものと考えられる。

これは，交通路によるものと考えられる。８世紀後半は，繋～沢内街道（県道１号線）～横手へのルートがメインで，そのまま下れば，横手＝出羽国だった可能性がある。あわせて今の県道和賀線（県道１３号線）のルートもあったものと考えられ，それは陸奥国南部へ通じるルートだっただろう。このころの志波村の住人達にとっての幹線は山裾が主流だったのではないだろうか。川沿いは平坦地が広がるが，治水が行き届いていない当時は，頻繁に河は流路を変えていたと考えられ，かつては道路だった場所が湿地帯や小川に遮断されていることも想定できる。よって，河の影響を受けにくい山裾などが，陸路としては良かったのではないだろうか。

遅くても志波城が造営されるころ（９世紀初頭）には，大量の物資の輸送に北上川を使った水運が用いられたと考えられる。胆沢城・徳丹城に至るルートは北上川沿いのもの（＝今の４号線）になったものと考えられる。これが，志波村が陸奥国になった頃だと考えられる。



想定される古代の交通路

５　８世紀(奈良時代)の志波村の人々

８世紀の後半の志波村はどのような様子だったのか，考古学の発掘調査成果と，文献史料から考えてみよう。

まず，文献史料によれば，８世紀後半(奈良時代の後半)の志波村や胆沢村は，反政府勢力一大拠点だったことがわかる。前述しなかった文献も総合してみれば，志波村の蝦夷は数千人の政府軍精鋭と交戦し，勝利を挙げている。当時の政府側からは，まさに「賊地」，反政府ゲリラの一大拠点のような扱いだったか・・・。

一方，発掘調査の成果でいえば，古代・志波村の範囲において，８世紀の半ば以降，集落が拡大拡散する様子が見られる。８世紀前半と比べ，集落数・竪穴住居数が増加し，それまで集落が営まれていなかった場所にも集落が発生する。集落は，一辺５ｍ以上の大型の竪穴住居１棟に，一辺４ｍ程度の中型，３ｍ以下の小型の竪穴住居が数棟ずつ衛星のように寄り添って構成されているのが一般的である。どの住居もカマドはおおむね北～西の方向に向きをそろえる。大型住居跡からは，豊富な土器のほか，鉄製品や土玉・土製勾玉など多くの出土品がある。一方小型の住居跡は，大形の住居跡と比べ遺物の出土量は少ない。また，甑（土器で作った蒸し器・米など穀物を蒸すのに使ったと思われる）は，たいてい大型住居に近接する中～小型の住居跡から出土することが多く，集落内で住居ごとに役割分担があったことが想定される。集落によって構成や出土遺物にあまり大きな差異はないが，たとえば盛岡市永井の高櫓Ａ遺跡からは，中～小型の竪穴住居跡を中心に多くの土製紡錘車（糸つむぎの道具）が出土するなど，集落の主

要な生業にかかわる遺物が特徴的に出土することがある。このことから，家父長制度のようなリーダー，本家のお父さん的な人が，大型住居に住み，中小型住居にはその親族血縁関係者が住んでいたということが想定され，そのような集団がいくつか集まって，集落・村を形成していたと考えられる。

集落の増加や竪穴住居跡の増加は，すなわち人口の増加を指す。この８世紀後半に人口が増加したことはいくつか理由が考えられる。人口が増えるには，それを支える食料生産量・獲得量が増加しなければならない。つまり，食糧生産力の向上，社会の安定，などである。食料生産力の向上とは，稲作農耕が定着したことによるものだろう。いくつか理由が考えられる。

第一に，ちょうどこの時期，８世紀後半から９世紀にかけて，地球規模の気候変動により，温暖化したという説がある。そもそも稲は熱帯の植物であり，東北北部は冷涼であるために育たない作物だった。気候の温暖化と稲の日本への定着に伴う品種改良によって，その栽培範囲が北進し，盛岡周辺も栽培適地になったことが考えられる。百目木遺跡（盛岡市三本柳）では，底部に籾の圧痕がついた８世紀の土器が出土している。このことからも，日常的に籾殻が身近にあったといえる。また，カマドのある竪穴住居跡は，その構造から，米や穀物を煮て（炊いて）食べることが主眼にある。甑の存在は，米や穀物を蒸して食べる風習があったことを表す。先述のとおり，甑が全ての竪穴住居から出土しないこと，一方で煮炊きに使う長胴の甕はほとんどの住居跡から出土することから，古代の人々は米や穀物を煮て（炊いて）食べることを日常とし，蒸して食べるのは珍しかったと思われる。これは現代の私達も，ハレの席で蒸した赤飯をたべることに通じる。（因みに，古代人は，蒸した米を「強飯」（こわいい・おこわの語源），炊いた米を「姫飯」（ひめいい・１年で最初に炊いたご飯を食べることを姫初めという。）といった。）

第二に，生産力向上が挙げられる。８世紀の盛岡周辺の集落からは，鉄製の道具が出土する。鏃などの武器もあるが，身近な農耕具にも鉄は導入されており，鋤先や鎌，斧などがみられる。鉄の釣針や魚や獣をつく銛なども見られる。鉄の道具の導入により，開墾や水路などが拓かれ，食糧生産力の向上があっただろう。

第三に，集団の統制がはかられるようになったことが考えられる。これは食糧生産力向上のみならず，社会の安定にも大きく寄与した。稲作農耕は，個人で行うより，集団で行った方が一段と効率が高い。機械化される前と同じように，集落ごとに協力して農作業を行ったことと考えられる。それには，統率力のあるリーダーが必要である。統率力のあるリーダーの存在は，地域社会に規律と安定をもたらし，人々はより安心して暮らすことができるようになったのではないだろうか。集落同士の水利争いなどもあったことと思われるが，それぞれの集落が，それぞれのリーダーに率いられ，争いや協議などを通じて，より広域のより強力なリーダーに率いられるようになり，いくつかの集落をまとめる連合体が組織されていったと思われる。それが政府側には「村」として認識されたのではないだろうか。

広域の**村のリーダーは，政府とも交流**があった。集落から出土する鉄の産地については，個別に詳細な科学分析をしていないのでわからないが，当時の鉄の一大産地は福島県の沿岸から

茨城県の沿岸部であり，官営のものであったことが判明している。製鉄にはそれなりの技術と施設が必要であり，原材料があれば誰もが作れるものではない。そのような鉄が集落から出土するということは，おそらく村ごとのリーダーが，それぞれの村の特産品とともに政府側の施設（＝城柵）に出向き，交流し（＝朝貢），入手していたことが考えられる。これを**饗給**（きょうごう）といい，政府の対蝦夷政策の基本だった。各地の蝦夷を城柵に呼び，酒宴でもてなし，位階や姓，物資を与える。城柵に呼ばれたり，自発的に出向いたりした蝦夷は，特産物を持参したことから，一種の交易ともいえる。このことで，蝦夷のリーダーは，自分の村へ物資を運び，政府から位階をもらい，周辺の村々に対して自分の地位を確固たる物にできた。一方，政府側は蝦夷の特産品を手に入れるとともに，蝦夷側に政府・天皇の威光を示し，定期的に朝貢するようにさせ，懐柔し，最終的には国家に組み入れることを目指したのである（中華思想的考え）。政府と良好な関係を保てば，政府と戦をすることも無く，鉄などの物資や最新の技術や情報も手に入ったことだろう。

しかしながら，戦乱もあったことは，これらの交易の中で貴族たちが蝦夷から搾取したり，蝦夷の居住域近くに，関東や陸奥出羽南部から多くの移民を配置したりする同化政策をとったりするなど，蝦夷の反感を買うことがあったからだろう。

また，この時代の主要な集落の近くには，「古墳群」が営まれている。古墳は，リーダー層・家父長の墓と思われる。太田蝦夷森古墳群（盛岡市上太田）からは，当時の貴重品でもあるガラス玉や勾玉など権威を示す装飾品のほか，鈴帯金具（かたいかなぐ）、和同開珎（わどうかいちん）、が出土している。鈴帯金具や和同開珎は、政府から下賜された可能性があり、被葬者の社会的な地位をあらわす。このほか，蕨手刀２振と直刀２振の出土もあり，これも被葬者の社会的地位を表す遺物として注目される。

これらのことから，**村のリーダー層は，①政府との関係性を持っていた，②周辺の蝦夷集落よりも優位に立つことなどから，権威が必要だった，③その統率力は，古墳から武器が出土することから武力的な面でも発揮された**，などの特徴が読み取れる。

６　そして志波城造営

志波城の造営された志波村は，８世紀後半は反政府一大拠点，８世紀末には帰順，そして９世紀初頭に志波城が造営された。志波村リーダーが，８世紀末に帰順の意を表したことが文献から読み取れる。

陸奥国言（もう）さく，「斯波村の夷，胆沢公　阿奴志己(いさわのきみ　あぬしき(こ))等，使を遣わして請ひて曰く，己等王化に帰せんと思い，何日忘れず。而して伊治村の俘に遮られるため，自ら達する由なし。願わくば彼の遮闘を制し，永く降路を開かんと。即ち朝恩を示さんがため，物を賜いて放還す」と。

（『類聚国史』 延暦 11(792)年 1 月 11 日条）

この真意は，その前段階で政府と激しい戦いで疲弊したためか，戦っても無駄でありむしろ良好な関係を保った方が得策と考えたのか，真相はわからない。しかし，その頃は，まさに胆沢の蝦夷たちはアテルイというリーダーに率いられ，政府軍との戦争状態にあった。志波村がこれに同調し，共同戦線を張って協力したかは不明である。のちに，胆沢城造営とともに胆沢の蝦夷アテルイらが降伏し，その翌年，志波城が造営された。これは，胆沢の蝦夷を降伏させたことで，志波村まで反抗勢力がなかったことを示す。そうでなければ，胆沢の蝦夷を降伏させた後は，和我・稗縫・志波の蝦夷たちと戦わねばならなかったのではないだろうか。

胆沢が降伏したことで，以北の蝦夷たちもこぞって降伏した可能性もあるが，延暦 11（792）年の斯波村の夷，胆沢公阿奴志己等が帰順を表明していたこととも合致し，**坂上田村麻呂**は胆沢蝦夷の倒伏後に一気に親政府派の志波まで，版図を広げることができたのではないだろうか。

志波城が造営されたことによって，周辺集落にはどのような変化が見られたのだろうか。

これまでの発掘調査成果から，８世紀末～９世紀前葉にかけて集落には大きな変化が見られない。宮城県北部や胆沢城周辺のように，政府による移民の村（計画村落）も見つかっていない。このことから，志波城は親政府派の村の中に，**既存の周辺勢力を温存したまま**つくられたと考えられる。それまでの宮城県～岩手県南部における統治方法つまり圧倒的な軍事力を持って反抗勢力を倒伏させ，そののち東国や陸奥国南部から移民を配置し，蝦夷を同化させる政策とは異なった統治思想だったのではないだろうか。

これは，**坂上田村麻呂の意向**とも考えられる。

坂上田村麻呂は，胆沢の蝦夷アテルイらが降伏したのち，京都へアテルイとモレを連れて行ったとき，アテルイとモレを助けそのまま胆沢地方を統治するためのリーダーとするように重臣達に進言している。しかし重臣達は，蝦夷軍の頭領を助けその土地に返すことは，飼った虎を野に放つのと同じだと，田村麻呂の進言を認めず処刑された。このことから，坂上田村麻呂は長年の戦争から，新しい東北統治方として既存の勢力を活かすことを考えたのではないだろうか。戦争や移民政策をしなくても，理解し，懐柔することで，治める方法を考えていたのではないか。

この根拠に，志波城には，他の東北地方に２０数箇所つくられた城柵とは異なった特徴がいくつかある。

他の城柵を凌駕する規模を持つこと，郭内に 1200～2000 棟もの竪穴建物を内包すること，巨大な政庁，政庁内に正殿脇殿以外の建物群を配置することなどが上げられる。陸奥国府多賀城に匹敵する規模を持つことは，地元蝦夷たちの協力があったことや，周辺地域の統治だけでなく，より北方を目指す拠点として整備したためだろう。郭内の竪穴建物域からは，地元で使われていた土器も出土する。もちろん，周辺集落よりも須恵器（すえき・専門工人がのぼり窯を使ってつくる官的な土器）の出土が多いという特徴はあるが。竪穴建物は兵舎や役人達の官舎として使われたと考えられる。政庁は儀式空間であり，対蝦夷の饗給や各種儀式が行われる場所であり，正殿・脇殿とそれに囲まれた広場があれば機能的には満足する。しかし正殿後方に見られる建物群は，他の城柵官衙遺跡には見られず一種異様である。これも志波村の蝦夷たちが

造営に積極的に参加したためにみられる特殊事情である可能性を指摘する方もいる。

周辺の集落においては，９世紀半ば（徳丹城廃絶・胆沢城一城体制の整備）まで，大きな変化は見られない。たとえば**文化の基層ともいえる葬送をみれば，９世紀にも古墳群が作られ続け**た（盛岡市向中野・下飯岡の飯岡沢田遺跡など）。これは城柵設置にともない，**文化が解体されていない**ことを示す。文化は人々が育み続けた所産であり，それは同族意識・アイデンティティに結びつく。従前の征夷政策は，移民を配置したり，蝦夷を西国などに移配したりする「同化政策」がとられており，城柵とともに人々の社会までをも再編するものだったが，志波城の周辺では，そのような形跡は見て取れ無い。

これが，坂上田村麻呂の目指した征夷であり，その帰結点が，志波城造営だったのではないか。戦争で住民も国も疲弊することなく，政府の政策にもとづき，版図の拡大を目指したのではないだろうか。

７　坂上田村麻呂の目指した東北経営

常に蝦夷政策の前線で活躍し，戦功をあげてきた坂上田村麻呂。

彼の目指した征夷政策の帰結点が，志波城造営にみられる既存住民勢力を温存し，平和裏に政府版図を拡大することだったのではないだろうか。

実際には，志波城造営後も大規模な征夷計画が立てられ，坂上田村麻呂は引き続き総責任者として征夷大将軍に任命されていた。最大規模の志波城には，その拠点としての圧倒的な軍事力を保持すること，その後の版図拡大の遠征と統治のために，鎮守府移転を検討していた可能性もある。しかし，征夷遠征は，実際に実施されなかったが，それ以前の遠征と同規模で行われる計画だったことが，文献資料から読み取ることができる。つまり，**反抗する蝦夷集落を，圧倒的な軍事力を誇示しつつ，すでに政府側についた蝦夷の村は，そのまま以前の生活と変わらない暮らしを送っている様子を喧伝**することで，懐柔を図ろうとしたのではないだろうか。

しかし，疲弊した国政を改善するため，桓武天皇は，治世の徳について論じさせ（**徳政相論**），軍事と造作（対蝦夷戦争と平安京の造営工事）を停止することを決めた。“事業仕分け”である。計画されていた征夷計画は取りやめとなり，以後坂上田村麻呂は天皇のよき腹心として出世していった。東北地方には数多くの田村麻呂伝説がのこる。特にも毘沙門天との関連が強い。

大宮神社に残る縁起や飯岡山ふもとの観音像など，地元の英雄としての伝承が多い。

８　その後の志波城

造営の約１０年後，志波城は雫石川の洪水の被害を度々受け，文室綿麻呂（ふんやの わたまろ）によって，徳丹城を造営し機能を移転する。

地元蝦夷の協力の下造営されたのであれば，ただでさえ暴れ河であった雫石川の影響があることを知らずに造営したとは思えない。おそらく当初は洪水被害など想定できない最適の地だったのだろう。旧地形では周辺で最も標高が高く，広大な土地が取れる場所を選んだといえる。川岸に近く，広大で便利な場所（交通の要衝，既存集落のあった場所）に造営したと思われる。しかしながら，移転を余儀なくされたとされる洪水被害にあったことは，造営に周辺の木材を多く使ったこと，城内で多くの人々が蒔などに多くの木材をつかったことにより，林地が伐採され山の保水力が低下し，想定外の洪水が起きたのだろう。

廃絶後の志波城には，しばらくの間兵が置かれ，周辺の治安を守ったが，主要な建物は解体撤去され，雫石川から北上川を使った水運で徳丹城に運ばれた。

その後も志波城内には，集落が入り込んだ様子は見て取れず，中近世以降にようやく人が入り込むようになる。これは，一定期間「聖地」的な扱いを受けたのではないだろうか。一方で，志波城の北東から東に，9 世紀末から１０世紀代にかけての地域の拠点的な集落が営まれた（林崎遺跡・大宮北遺跡・大宮遺跡）。志波城という聖地を使った統治があったのではないか，さらに，この統治には安倍氏などに通じる在地の支配者・勢力が関与していたことも想定される。

９　志波城は 盛岡 にあるのに，なぜ 「志波」城（しわじょう）というの？

現在，地名の「しわ」といえば盛岡市の南に位置する紫波町を指し，なぜ盛岡市に志波城があるの？と不思議に思う方もいらっしゃると思います。

この「志波城」という名称は，平安時代頃につくられた歴史書「日本紀略」などに姿を現し，志波城という城柵は坂上田村麻呂によって延暦 22（803）年に造られたということは，古くからわかっていました。

しかし，長い間その所在地は不明で，さまざまな場所が擬定地として考えられていました。花巻市の鳥谷ヶ崎，紫波町古館の城山，紫波町赤石大字北日詰大日堂付近，紫波町陣ヶ岡付近などがあり，そのひとつに盛岡市の太田方八丁がありました。

東北縦貫自動車道が太田方八丁遺跡を通ることになり，1976～77 年に発掘調査が行われたところ，築地塀跡や大溝跡，おびただしい数の竪穴住居跡などが見つかり，この太田方八丁遺跡が，それまで場所のわからなかった志波城跡ではないかとクローズアップされるようになりました。その後も続く発掘調査成果より，まさに長年所在地不明だった志波城跡であると確認され，1984（昭和 59）年に国の史跡指定を受けました。

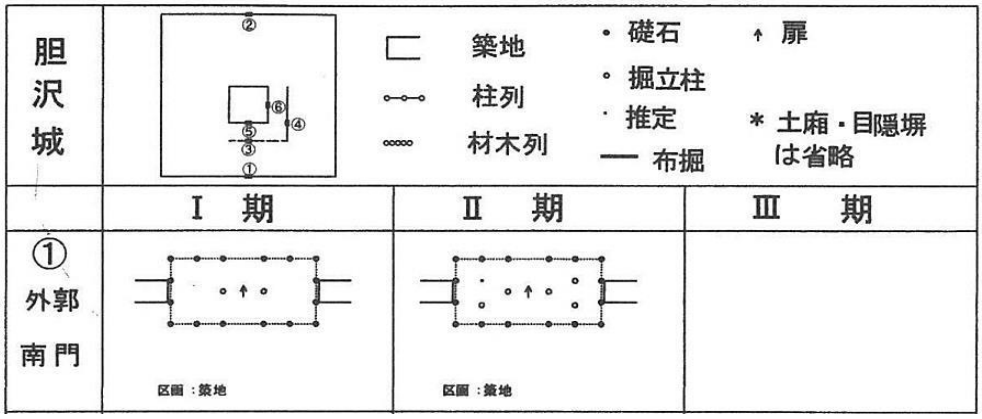
平安時代，「志波（斯波）郡」や「志波（斯波）村」と呼ばれた地域は，今の盛岡市南部，雫石川の南岸から今の紫波町付近の広い範囲だったと考えられており，志波城はこの地名をつけた城柵です。同様に，奥州市に「胆沢城」（旧水沢市。旧胆沢町ではない）が造営されています。

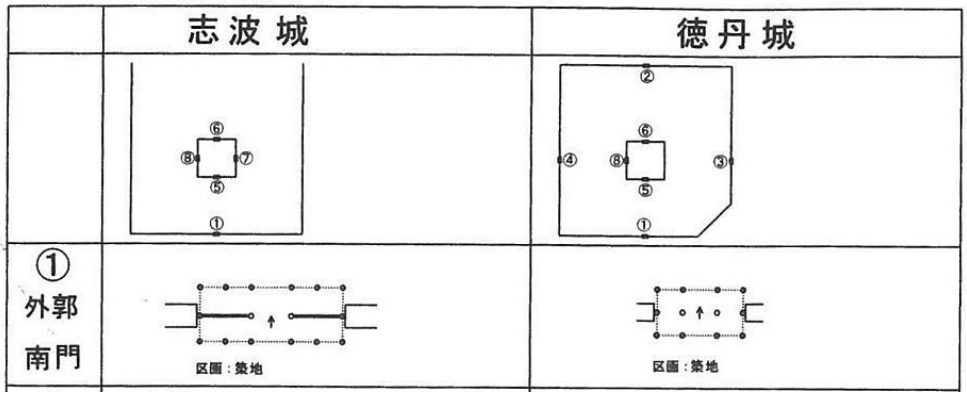
盛岡と呼ばれるようになるのは，南部氏が拠点としたつい 400 年ほど前の最近のことです。

10　志波城と胆沢城

遺構から，坂上田村麻呂主導で造営した２つの城柵の共通点と相違点，注目点を見てみよう。

共通点	相違点，注目点
・外郭南門が五間一戸（城柵最大級） ・平坦地に小河川を取り込んで造営 （物資運搬流通によい） ・外郭が築地塀（堅固，立派）	・政庁規模と構造が違う 志波城は築地，胆沢城は掘立柱列 ・志波城が徳丹城へ移転後に，胆沢城に前門が設置され，政庁東の饗給施設が充実。





（図は，国生尚「胆沢城五間門の構造と性格」第 42 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集より）

以上から，坂上田村麻呂の政策や鎮守府志波城構想が読み取れるのではないか。

志波城造営時には，次期征夷計画がすでに念頭にあったと思われる。その計画は従来どおり，大規模な計画だったことから，その拠点となる志波城が最大規模に造営したことが考えられる。

城柵最大規模の広大な敷地は，最前線の城柵として守りを固め，兵舎を内包し，練兵するに適している。このとき配置された兵は，鎮兵であり，国府直轄ではなく，陸奥国府下部組織であった鎮守府が所管していた。

あわせて，文献上志波城には陸奥国志波城という表記はみられず，国府直轄の城柵ではなかった可能性がある。つまり，国司，按察使，鎮守将軍，征夷大将軍という全権をもった田村麻呂だからこそ作ることのできた城柵とみることができる。

文献上に陸奥国志波城という表記がないことは，ひょっとすると多賀城にあった鎮守府主導で設置された最前線の城柵として，鎮守府の機能が置かれていたとみることができるのではないか。

この**鎮守府主導の城柵のシンボル的な特徴が，五間一戸の外郭南門**とみることができよう。

より前線に近い志波城は，外郭が一町溝，外大溝，築地塀により堅固な様相を呈し，政庁も最も格式高い築地塀により囲郭され，城柵最大級の規模で造営されている。一方，胆沢城の政庁は掘立柱列塀で格が下がる。しかし，胆沢城と比較して官衙建物がすくないことなどから，胆沢城が志波城を支える実務機能を持ち，志波城が対蝦夷朝貢饗給機能と兵の維持機能をもっていたとみられないだろうか。

そしてこのような陸奥国のみならずより広域な統治体制などを見越した造営は，東北経営の全権を担っていた田村麻呂でなければできなかったのではないだろうか。

田村麻呂は当時の常識では考えられない敵将アテルイの助命嘆願をした。このように，それまでの征夷とは異なった手法を考えたのではないか。

アテルイを地域統治の村長に任じ，ほかの反政府蝦夷リーダーを投降させることを考え，これが蝦夷社会を統治する良い方法だと考えたのだろう。

アヌシキの志波村においては，その前に政府側につき，懐柔の地になっていたことから最大規模の最前線の城柵志波城造営に協力したことが予想される。

あわせて，志波城造営前後の周辺の集落（盛南地区）を比べると，志波城の造営前後において大きな変化が見られない（竪穴建物の構造）。あわせて，古墳群の造営の様子も変化が見られず，その後も時代に応じた形態と位置の変化はあるが，9 世紀半ばまでつづく。集落と古墳群の在り方は，その社会の在り方を体現していることから，変化しないということは，外的要因による圧力がかかっていないといえる。志波城造営時に周辺の地元蝦夷集落は影響を受けず，そのままの暮らしを続けられたといえよう。

志波城造営は，田村麻呂の描いた今後の東北経営のひとつの理想とした帰結点だったといえる。この城柵を拠点として，新しい東北経営を推進し，より北へ向かう予定だった。

しかしながら，疲弊した国家を立て直す必要があり，桓武天皇は徳政相論で軍事と造作を中止した（805 年）。徳政相論の内容は，田村麻呂の助言もあったのかもしれない。徳政相論で征夷中止を述べた藤原緒嗣（ふじわら　おつぐ）は，田村麻呂の後任の陸奥出羽按察使に任じられ，８０９年陸奥国へ赴き，役人や平氏，民衆の保護政策充実に励んだという。

これ以降，積極的な蝦夷政策はとられることがなくなり，前の計画に沿って作られた広大な志波城を維持する必要性が低くなった。

結果，志波城の地域統治拠点としての機能は徳丹城へ，鎮守府として蝦夷たちの朝貢を受け饗給をすることや軍事的な防御拠点としての機能は胆沢城へ，それぞれ引き継がれたのだろう。

このことは，徳丹城造営前に，志波城政庁とほぼ同じ規模の官衙が造営されたことで地域統治機能を維持させたまま移転作業が行われたと推測されること，あわせて胆沢城において志波城廃絶を契機に，政庁前門が造営されたり，東方官衙が充実したりし，それまで以上に「饗給施設」としての機能が向上したことがあげられる。

以上から，志波城は，坂上田村麻呂による東北経営の一大拠点として国家の威信をかけて造営された城柵であり，その当時の社会情勢を如実に物語る貴重な歴史遺産といえよう。

11　まとめ

盛岡市周辺および以南のこの状況を，坂上田村麻呂以前と以後の政策の変化と時代の流れをまとめてみる。

<table>
<tr><th rowspan="2">時期</th><th rowspan="2"></th><th rowspan="2">国家政策</th><th colspan="2">対蝦夷政策</th><th colspan="2">蝦夷村落</th></tr>
<tr><th>志波城周辺</th><th>胆沢城以南</th><th>志波城周辺</th><th>胆沢城以南</th></tr>
<tr><td>奈良時代</td><td></td><td>多賀城</td><td colspan="2">争い</td><td rowspan="4">家父長制
古墳群</td><td rowspan="2">計画村落
移民政策
4000 人</td></tr>
<tr><td>奈良末～
平安初期</td><td rowspan="3">坂上
田村麻呂</td><td>胆沢城
志波城</td><td>親政府
アヌシキ</td><td>反政府
アテルイ</td></tr>
<tr><td rowspan="4">平安
前～中期</td><td>803 志波城
鎮守府移設</td><td>岩手県北部
へ次の征夷
計画立案
↓</td><td rowspan="2">直接統治</td><td></td></tr>
<tr><td>805
徳政相論</td><td>→ 廃止</td><td></td></tr>
<tr><td>藤原緒嗣
文室
綿麻呂</td><td>胆沢城
徳丹城</td><td colspan="2">直接統治→全国規模の統
治から陸奥国内の統治へ</td><td colspan="2">拠点集落　の発生
集落域の拡散</td></tr>
<tr><td></td><td>胆沢城</td><td colspan="4">胆沢城･政府による在地豪族を村長として
位階を与え間接統治</td></tr>
<tr><td>平安後期</td><td>安倍氏</td><td></td><td colspan="4">胆沢城を掌握した<u>安倍氏</u>による
在地豪族を使った間接統治</td></tr>
</table>

胆沢城と志波城の外郭南門の復元はほとんど同じです。

左）AR 胆沢城の映像。外郭南門が現地でスマホの画像で見られます。

右）志波城　実物大に復元整備してあり，当時の雰囲気を味わえます。

12　坂上田村麻呂　　天平宝字２(758)年～弘仁２(811)年

天平宝字2 年(758)坂上苅田麻呂の子として生まれ，弘仁2 年(811 年)5 月 23 日に 54 歳で病死。

坂上氏は，古代中国の後漢霊帝の後裔と言われ、応神天皇の時代に日本に帰化した阿智王(阿智使主)を祖とすると伝わる。田村麻呂の曽祖父･祖父の代から，武門の一族として活躍。

田村麻呂は「**身長五尺八寸，胸の厚さ一尺二寸，向ひて視れば偃するが如く，背より視れば俯するが如し。目は蒼鷹の眸を写し，鬢は黄金の褸を繋ぐ。**(『田邑麻呂伝記』)」,「**赤面，黄鬚**(『薨伝』)」と伝えられる。生前は，日焼けをした赤ら顔で，黄金色の豊な髭をたくわえ，鷹のようにすんだ鋭い瞳を持ち，身長約 180cm，胸の厚さ約 36cm，前から見るとのけぞっているかのように見え，背中から見るとうつむいているように見えるということから，体格がよい人であったようである。

その人柄は,「**怒りて眼を廻らせば猛獣も忽ち斃れ，咲ひて眉を舒めば稚子も早く懐く**」･「**丹款面に顕れ，桃花春ならずして常に紅く，勁節性を持し，松色冬を送りて独翠なり。**(『田邑麻呂伝記』)」と記され，誠実で温厚，高潔な品性を表現している。

「**勇力人に過ぎ，将帥の量あり**(『薨伝』)」,「**策を帷帳の中に運らし，勝を千里の外に決す**(『田邑麻呂伝記』)」,「**頻りに辺に兵を将ゐて，出づる毎に功あり。寛容に士を待し，能く死力を得たり。**」と，武将として，綿密に計画を練り，戦闘では必ず勝利を収め，部下には寛容で信用を得ていたと伝わる。

田村麻呂が若年の頃から陸奥国では蝦夷との戦争が激化しており，延暦 8 年(789 年)には紀古佐美(きの こさみ)の率いる軍が**阿弖流為（あてるい）**に大敗した。田村麻呂はその次の征討軍の準備に加わり，延暦 11 年(791 年)に大伴弟麻呂(おおともの おとまろ)を補佐する征東副使に任じられ，延暦 12 年(793 年)に軍を進発させた。この戦については『類聚国史』に「**征東副将軍坂上大宿禰田村麿已下蝦夷を征す**」とだけあり，田村麻呂は四人の副使(副将軍)の一人ながら中心的な役割を果たしたようである。

延暦 15 年(796 年)には**陸奥按察使･陸奥守･鎮守将軍を兼任**して戦争正面を指揮する官職をすべてあわせ，加えて翌年には**征夷大将軍**に任じられた。延暦 20 年(801 年)に遠征に出て成功を収め，夷賊(蝦夷)の討伏を報じた。いったん帰京してから翌年，胆沢城を築くために陸奥国に戻り，そこで阿弖流為と母礼(もれ)ら五百余人の降伏を容れた。田村麻呂は彼らを許すことを主張したが，都の貴族は反対し，二人を処刑した。翌，延暦 22 年(803 年)には**志波城**を造った。

延暦 23 年(804 年)に再び征夷大将軍に任命され，三度めの遠征を期した。しかし，延暦 23 年(804 年)に藤原緒嗣が「軍事(東北地方の軍事行動)と造作(平安京の造営作業)が民の負担になっている」と論じ，桓武天皇がこの意見を認めたため，征夷は中止になった(**徳政相論**)。その後も昇進し，延暦 24 年(805 年)には参議，大同元年(806 年)に中納言，弘仁元年(810 年)に大納言になった。この間，大同 2 年(807 年)には右近衛大将に任じられた。また，田村麻呂は京都の**清水寺を再建**したと伝えられる。史実と考えられているが，詳しい事情は様々な伝説があってはっきりしない。

田村麻呂は弘仁 2 年(811 年)5 月 23 日に 54 歳で病死した。嵯峨天皇は哀んで一日政務をとらず，田村麻呂をたたえる漢詩を作った。死後従二位を贈られた。墓所は，京都市山科区の西野山古墓と推定される。

西野山古墓出土　鉄刀･鏡

清水寺田村堂内　座像

東京大学　小堀鞆音画肖像画